セルジューク朝と後期ガズナ朝

——その國境地帯について——

稲葉穣

はじめに……六三七頁
一　ダンダーナカーン以後の兩王朝の政治的關係……六三九頁
1　マウドゥード時代
2　アブド・アッラシード、トゥグリル、ファッルフザード時代
3　和平とそれ以後
4　サンジャル時代
二　北方の状況……六四五頁
1　四六五／一〇七二—七三年までの状況——HYBAN/Hupyān と Sakalkand
2　バルフ、トハーリスターンの混亂——四六五—九一／一〇七二—九八
三　南方の状況……六六〇頁
1　ブストについて
2　スィースターンの内紛と兩王朝
むすびにかえて……六六六頁

はじめに

ヒジュラ暦四三一／西暦一〇四〇年(以下同)、ガズナ朝はダンダーナカーンにおいて、トゥグリル・ベク Tughril Bek、チャグリ・ベク Chaghrī Bek に率いられたセルジューク軍に敗北し、その西方領土ホラーサーンを失った。以後、五一〇／一一一七年にセルジューク朝のサンジャル Sanjar によってガズナが征服されるまでの約八十年の間、少なくとも表

面的には、兩王朝の間に一種の勢力均衡狀態が現出されていたかに見える。しかしながらそのような勢力均衡が樣々な要素の上に成り立っていたものであろうことは想像に難くない。本稿はこの八十年間の兩王朝の關係を考えようとするものである。一般に二つの王朝の關係を考える際、先ず問題になるのはその國境地帶[1]であろう。兩者の國境地帶が何時頃どの邊りにあったのか、それが如何なる事情によりどの樣に變動したのか。それらを考えることによって、兩王朝の關係のみならずその時代の政治史全般にも新たな角度から光を照射することもできるのではなかろうか。ところでこの八十年間の全體的な政治史については既にボズワース C.E. Bosworth が二度にわたってかなり詳しく述べており [Bosworth 1968a; *idem.* 1977]、兩王朝の關係もそれらの中である程度檢討されている。只、一方は概說的、網羅的色彩が濃く、もう一方は記述の中心を後期ガズナ朝の政治史に置いているために、國境地帶を巡る兩王朝の事情や動き、あるいは地理的な問題が十分に述べられていないうらみがある。そこで本論では特に兩王朝の國境地帶の狀況の變化と政治史の關係に論點を絞って考えてみたい。それによって、不明な點の多いこの時代のホラーサーン、アフガニスタンの歷史、地理的狀況を幾分なりとも解明し、併せて次の時代、すなわちサンジャルによる大セルジューク朝の復興、グール朝、ホラズムシャー朝の臺頭等による、ホラーサーン、アフガニスタンの新たな激動の時代が如何なるバックグラウンドから生み出されたのかを理解する一助としたい。

具體的には先ずこの八十年間に兩王朝の間に生じた事件を *al-Kāmil fī al-Ta'rīkh*、*Akhbār al-Dawla al-Saljūqiya*、*Ṭabaqāt-i Nāṣirī* 等の史料[2]の記述から拔きだして年表形式に表わし、そこから引き出される問題を檢討するという手順で論を進めていく。

一　ダンダーナカーン以後の兩王朝の政治的關係

さしあたってこの年表より明らかになることは次の二つである。第一に兩王朝の關係が四六五／一〇七二―七三年を挾んでおおきく二つの時期、すなわち交戰期と不戰期に分かれるということ。第二に兩王朝の主戰場が北はトハーリスターン、南はブスト、スィースターンであったということ、である。本章は先ず第一の點について述べる。

右で述べた二つの時期はさらに各々二つずつに分けられる。すなわち四六五／一〇七二―七三年以前についてはマウドゥード Mawdūd 治世とそれ以後、四六五／一〇七二―七三年以後についてはサンジャルがホラーサーンの malik となる前と後である。個々の事件については先に述べたボズワースの研究があり、また幾つかについては後で詳しく觸れるので、ここでは順に各々の時期の政治狀況の概略を見ておくにとどめる。

1　マウドゥード時代

ダンダーナカーンから逃げ戻ったマスウード Mas'ūd はセルジューク朝に對する手配りとして軍をブストへ派遣し、セルジュークの包圍にあって孤立したバルフへの援軍として先ずハージブの Ālūntāsh と千騎を送る[3] [TB:869-71, 877]。その後 Ālūntāsh 軍の敗北の報を受け、王子マウドゥード Mawdūd を司令官とする大軍團を編成して HYBAN へ向かわせ、自身はヒンドゥースターンに向かったが、途上、兄弟 Muḥammad を擁する配下の反亂に遭い、死去した。マウドゥードは HYBAN よりガズナに戻り、叔父 Muḥammad の軍を擊退し卽位した [*ibid.*:882-91; ZA:204-06]。彼は卽位後、離反したスィースターンに對して軍を送ったことを手始めに、セルジューク朝に對して積極的な軍事行動を繰り廣

表1　ガズナ朝とセルジューク朝の關係年表（431/1040-510/1117）

年（ヒジュラ暦／西暦）	Ghazna 朝の君主達	Balkh, Ṭukhā. の統治者	北	南	Sīstān の統治者 (Slj.)
431/1039-40	Mas'ūd		・ダンダーナカーンの戰い：ガズナ軍の完敗		Bayghū & Ertāsh
		Chaghrī Bek	◆バルフ救援のため Ṭukhāristān 方面へ一千騎の軍派遣	◆Nūshtekīn-i Nawbatī をブストに派遣	
			◆王子マウドゥード率いる大軍勢を HYBAN に	◆Abū Sahl-i Zawzanī をブストに派遣	
432/1040-41	Mawdūd		＊★バルフ陷落	◆スィースターン派兵→敗北	
433/1041-42				◆スィースターン派兵→セルジュークの Ertāsh の軍に敗北	
434/1042-43			◆Ṭukhāristān 派兵，バルフ一時奪還	◆ハージブ Ṭughril，スィースターン攻撃→Abū al-Faḍl と一旦和す	
435/1044-45			＊★Tirmidh 陷落(？)		
			＊★ヘラート陷落(？)		
			◆Ṭukhāristān 派兵→Alp Arslān により撃退される		
437/1045-46				★Ertāsh 軍スィースターンからガズナ目指して北上→ガズナ軍に敗退	
440/1048-49	Mas'ūd, 'Alī 'Abd al-Rashīd		◆對セルジューク大同盟 →カラ・ハン朝，イスファハーンの Abū Kālījār 等と		
442-43(?)/1050-51			★セルジュークの攻勢		
443 Rajab/1051. 11			★Alp Arslān, Ṭukhāristān から南下 →HYBAN の戰い	★Chaghrī Bek ブストより北上 ◆Ṭughril スィースターンを攻撃	
Sh'a/52. 1	Ṭughril				
443 Dh. Q(?)/1052. 3(?)	Farrukhzād		★ハージブ Khirkhīz, Chaghrī 軍を撃退 [IA]	★Nūshtekīn, セルジューク軍をブストで撃退 [Ḥs]	
			◆ガズナ軍ホラーサーンへ→Chaghrī (Alp Arslān) 軍を破る Chaghrī (Alp Arslān) の反撃→兩軍捕虜交換 →和議への動き？		Chaghrī Bek

451 Ṣaf./1059.4	Ibrāhīm				Bayghū
452/1060-61 (455/1063)		Alp Arslān	◆★Ibrāhīm と Chaghrī の間に和平協定締結		
456/1063-64		↕ ?			
458/1065-66		Sulaymān(B)	◆★Arslānshāh b. Alp Arslān と Ibrāhīm の娘結婚		?
		Ilyās(Ṭ)			
465/1072/73		Ayāz(B)	◆Ibrāhīm, Sakalkand 出兵 ▼カラ・ハン朝 Tirmidh 奪取		
467/1074-75 (?)		Tekish(B)	◆★Mas'ūd b. Ibrāhīm と Malikshāh の娘の婚儀		
477/1084-85		Aḥmad(B)			
481/1088-89	Mas'ūd				
486/1093-94		Arslān Arghūn			
490/1096-97		Muḥammad	◆Muḥammad b. Slaymān 反亂←ガズナ朝援助		
		Dawlatshāh(Ṭ)			
491/1097-98		Sanjar			
495/1101-02					
508/1114-15	Malik Arslān		▼Qadir Khān ホラーサーン侵攻	★サンジャル，スィースターンを制す ★サンジャル，ブストへ派兵 →ガズナ軍の勝利	Sanjar
510/1116-17				★サンジャルの親征→ブストからガズナ	
Shawwāl 20 /1117.2.25				★サンジャルのガズナ征服	

凡例

◆：ガズナ朝のセルジューク朝に對する軍事行動

★：セルジューク朝のガズナ朝に對する軍事行動（＊付きはホラーサーン確保のためのもの）

▼：カラ・ハン朝の軍事行動

セルジューク朝と後期ガズナ朝　　表1

げる。しかしそれらのほとんどはセルジューク朝により撃退された。セルジューク朝側はその間にバルフ、ヘラート、ティルミズを陥落させ、チャグリ・ベク、アルプ・アルスラン Alp Arslān 父子の指揮のもと、ホラーサーン支配を確立していった。幾度にもわたる軍事行動の失敗を經たマウドゥードは四四〇／一〇四八年、ホラーサーン縁邊の各地の王達に手紙と多額の金品を送り、作戰成功後の領地分配を約束して、對セルジューク大同盟を樹立した。イスファハーンの Abū Kālijār、カラ・ハン朝のハーンが参加したことが史料に見える。しかし Abū Kālijār は軍を率いてケルマーン經由で西行する途上、砂漠地帶（おそらくはルート砂漠）を越える際に多くの兵を失い、自らも病にかかって引き揚げてしまった。カラ・ハン朝の軍はティルミズ、ホラズムを攻撃したがティルミズ方面ではアルプ・アルスランに、ホラズム方面ではチャグリ・ベクに撃退され、結局カラ・ハン朝の Ṭamghach Khān (Ibrāhīm b. Naṣr) とチャグリ・ベクの間で講和條約が結ばれた。なにより肝心のマウドゥードが軍を率いてホラーサーンに向かう途上、重い病にかかり、ガズナに歸還後まもなく死去してしまう [IA ix:558–59; Ḥs:16b–17a]。こうしてこの大同盟も結局不發に終わったのである。まとめるなら、王國分裂の危機を收拾しセルジューク朝に對して反撃に轉じたマウドゥードの盡力もセルジューク朝に阻まれ、セルジューク朝によるホラーサーン領有が確立した時期と言えよう。

2　アブド・アッラシード、トゥグリル、ファッルフザード時代

マウドゥードの死後その幼い息子 Mas'ūd が即位したが數日で廢位され、マウドゥードの兄弟 'Alī が即位した。同じ頃、ガズナの南方の砦に幽閉されていたマウドゥードの叔父アブド・アッラシード 'Abd al-Rashīd がマウドゥードのワズィール 'Abd al-Razzāq により解放され、軍勢とともにガズナに向かった。知らせを受けた 'Alī は逃亡し、アブド・アッラシードが即位した。

この混亂に乗じチャグリ・ベク、アルプ・アルスランは南北兩面からガズナへ侵攻をはかり、前者はブストから、後者はトハーリスターンからガズナへ向かった。この時、ガズナ朝のハージブ、トゥグリル Ṭughril は軍を率いて北進してHYBAN[4]でアルプ・アルスランを撃退し、そこから轉進して南に向かいチャグリの軍をブストで撃退した[5]。トゥグリルはブストからそのままスィースターンに進み、同地のアミール、アブー・アルファドル Abū al-Faḍl を攻圍し、ヘラートから援軍を率いて來たセルジュークのムーサー Mūsā Bayghū をも撃破した [IA ix:558, 580, 582; ṬN i:235; TS:371-72]。

このトゥグリルはもとマフムード Maḥmūd の臣で、マウドゥード時代に一度セルジュークのもとへ逃亡し、アブド・アッラシード時代に戻って來たと言う。彼はスィースターンで反亂を決意し、北上してガズナに入り、砦にたて籠っていたアブド・アッラシードを捕らえ殺して王位に就いた。そのうえマスウードの息子達九人をも殺し、マスウードの娘を娶った。しかし彼の治世も長くは續かず、簒奪より六十日ほど經ったある日、彼は一人のグラームにより殺された[6] [IA ix:582-84; Ḥs:9a-9b; ṬN i:236; IF:177-78]。彼の死後、生き殘っていたマスウードの二人の息子のうち、ファッルフザード Farrukhzād が臣下達の合意によって卽位した（四四三 Dh. Q.／一〇五二・三）[7]。チャグリ・ベクはアブド・アッラシードの死とその後の混亂を知り軍を率いてガズナを目指したが、ガズナ軍に撃退された[8]。王權が固まった後、ファッルフザードは大軍をホラーサーンに送り、セルジュークのアミール Kulsārugh を破って、彼を初め多くの軍人を捕らえた。チャグリは新たな軍を率いてガズナ軍に反撃し、多くの者を捕虜とした[9] [IA ix:584-85; Ḥs:9b, 17a; ṬN i:237]。その結果兩軍の間で捕虜交換が行なわれたと言う。

以上をまとめるなら、この時期はマウドゥードの死からトゥグリルの簒奪にいたるガズナ朝の混亂に乘じ、ホラーサーン領有を確實にしたチャグリ・ベク、アルプ・アルスラン父子が大攻勢をかけるが、今度は逆にガズナ朝に阻まれた時期

ということになる。[10]

3　和平とそれ以後

四五一・Ṣafar 月／一〇五九・四月ファッルフザードが死去すると、その兄弟イブラーヒーム Ibrāhīm が後を繼いだ。時期ははっきりしないが、彼の卽位と前後して、ガズナ朝とチャグリ・ベクとの間に和議が結ばれた。[11] すなわち、双方とも現有の領地を保持し、再び戰うことをしない、旨が定まったのである [IA x:5; Ḥs:17a; ṬN i:238-39]。[12] そして和平の證として、四五六／一〇六四年、アルプ・アルスランの息子 Arslānshāh と「ガズナの ṣāḥib（イブラーヒーム）」の娘を娶せ、その後マリクシャー Malikshāh の娘 Mahd-i ʿIrāq とイブラーヒームの王子マスウード Masʿūd の婚姻が爲された [IA x:41; Ḥs:34b]。イブラーヒームはこれを期にインドへ向かうこととなったと言われる。[13] 實際、イブラーヒームのセルジューク朝に對する軍事行動は、僅かに四六五／一〇七二—七三年の Sakalkand 出兵が史料に傳えられるのみである [IA x:78]。四八一—一〇八八—八九年イブラーヒームが死去すると彼の息子マスウードが後を繼いだが、彼の時代も狀況はほぼ同じであった。四九〇／一〇九七年、ホラーサーンで反亂を起こしたマリクシャーの從兄弟 Muḥammad b. Sulaymān にガズナ朝が援助を與えたとの記事が史料に見えるのみである [*ibid.* x:265]。[14]

この時期、和平條約締結により全面戰爭は終結し、兩王朝の間に一應の均衡狀態が現出したと考えられる。只、その背後には後で述べるような、セルジューク朝のホラーサーン支配の動搖があったことに注意しておかねばならない。

4　サンジャル時代

四九〇／一〇九七年ホラーサーンを押えていたアルスラン・アルグン Arslān Arghun b. Alp Arslān に對してセルジ

ューク朝のスルタン、ベルキヤルク Barkiyārq により派遣されたのが後のセルジューク朝スルタンであり、五一〇／一一一七年にガズナを征服したサンジャルである。彼は同年の Muḥammad b. Sulaymān の亂を平定した後バルフに留まり、以後、Dawlatshāh との戰い（四九一／一〇九八）、ホラーサーンのアミール、ハバシー Ḥabashī との戰い（四九三／一一〇〇）を經てホラーサーンを平定した。またカラ・ハン朝に對してもサマルカンドに傀儡君主を立てて北方の脅威を除き、混亂していたスィースターンをも一應服屬させた。詳しくはまた後で觸れるが、こうして五〇八／一一一四―一五年までにサンジャルによりホラーサーンの秩序は回復され、スィースターン、マーワラー・アンナフル方面の安全も確保されて、對ガズナ朝作戰の條件が整ったのである。

以上、年表にしたがって四三二／一〇四〇―四一年以降の政治史を概觀してきた。次章以下でこのような政治狀況の變動が國境地帶にどの様に影響したかを考えてみたい。

二　北方の狀況

まず北方の主戰場、トハーリスターン方面について檢討する。トハーリスターンは地名としてはかなりルーズに用いられ、その正確な範圍を確定するのはなかなか困難である。しかしここでは大體バルフ以東、アム河以南、ヒンドゥークシュ以北を指すと考える［Minorsky 1982:337］。

1　四六五／一〇七二―七三年までの狀況――HYBAN/Hupyān と Sakalkand

前章であげた時期區分に從い、先ず四六五／一〇七二―七三年までの狀況を考えてみる。しかしこの時期、北方につい

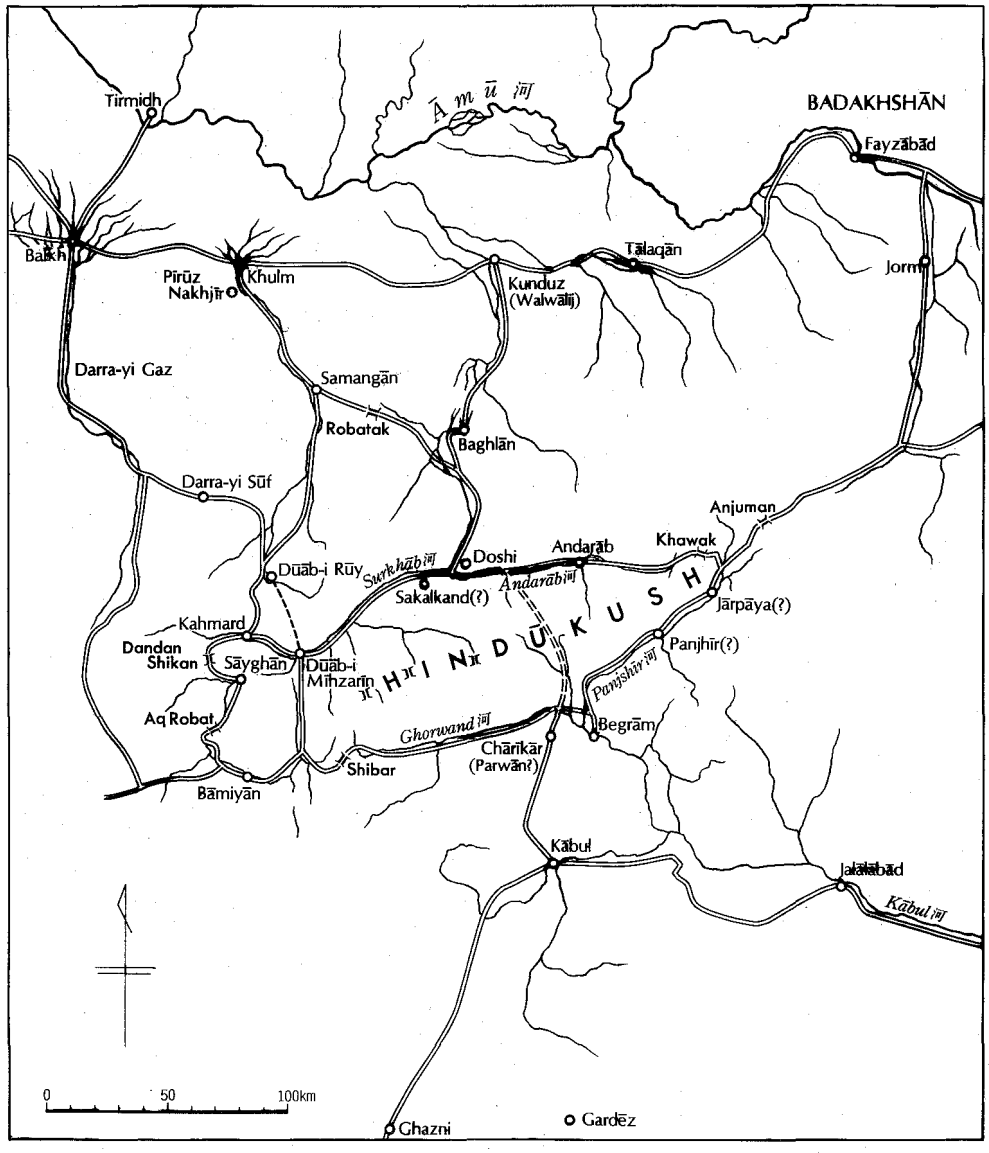
て具體的に知れる地名は殘念ながらHYBANとSakalkandのみ（表1参照）であるので、この二つを手がかりに考えるしかない。

先ずHYBANであるが、この地名はガズナ朝の同時代史料である*Ta'rikh-i Bayhaqī*と*Zayn al-Akhbār*、およびIbn Bābāの*Kitāb Ra's Māl al-Nadīm*に現われる［TB:882, 883, 885; ZA:204, 205; IB:141］。*Zayn al-Akhbār*の校訂者ハビーブ'A.Ḥ. Ḥabībīはこれを"Hupyān"と讀み、音の類似から現チャリカルの北西方にあるオピアンという村がこれに當たると考えた。[15] アダメックL.W. Adamecによればオピアンは現在、タジク人三百家族が住む村であると言う［Adamec 1985:613］。

それではこの説の妥當性はどうであろうか。先に觸れたように我々が問題にするHYBAN/Hupyānは戰略的要地であったらしい。それはマウドゥード率いる軍がそこに駐留したこと、またセルジューク軍との戰いがそこで行なわれたことから推測される。そこで、ヒンドゥークシュ越えのルートと戰略的重要性という觀點からこの地名を再考し、HYBAN/Hupyānを當時の政治史のコンテクストの中に位置づけることを以下で試みる。その手始めに文獻史料から知られる十一世紀までのヒンドゥークシュ越えのルートを見ておこう（圖1参照）。

六世紀を境にヒンドゥークシュ越えルートがインドと他の世界を結ぶ要路としてクローズアップされてくることが、既に桑山正進氏によって明らかにされている［桑山 1985］。桑山氏によれば六―七世紀のインド僧、中國僧がとった道は以下の通り。すなわち、六世紀のジナグプタは、カーピシー→大雪山西足→エフタル→ガルバンダ・ホタンというルートを取り、同じく六世紀後半のダルマグプタはタッカデーシャ→カーピシー→雪山西足→バグラーン→バダフシャンというルートを取った。また次の世紀の玄奘は往路と復路の二度ヒンドゥークシュを越えているが、往路は、縛喝（バルフ？）→揭職[16]

圖1　トハーリスターン地圖



↓バーミヤーン↓カーピシーと進み、歸路は、阿薄健↓漕矩吒（ザーブリスターン？）↓カーピシー↓アンダラーブ↓闊悉多(Khost)↓活(Walwālij)というルートを通っている［桑山 1985:166-71］。そこでこれら行歴僧が用いたヒンドゥークシュ越えのルートは、知られている限りでは、

・カーピシー↓パンジュシール↓アンダラーブ↓トハーリスターン

・カーピシー↓バーミヤーン↓トハーリスターン（バルフ）

の二種類であったと考えられる。この二つはパルワーン（現チャリカル近郊）からパンジュシール川沿いに東北へ進む道と、ゴールバンド川沿いに西方バーミヤーンに向かう道に各々當たる。

一方九―十世紀に書かれたイスラーム地理書に現われる道はどうであろうか。ド・フーイェ De Goeje 校訂による『アラブ地理叢書』におさめられた八つの地理書のうち、バルフ、トハーリスターン方面にまで記述が及んでいるのは Iṣṭakhrī, Ibn Ḥawqal, Maqdisī の三書であるが、[17] それらに記されるルートは

・バルフ→Khulm→Samanjān→Andarāba→Jārbāya→Banjhīr→Farwān（パルワーン）（計十五日行程）

・バルフ→Madhr→Kah（Kahmard）→バーミヤーン（計十日行程）

の二種類である。方向の違いこそあれ、それらは行歴僧達のルートと合致する。そしてそれらはガズナ朝時代にも存在したことが年代記から確認できる。

Ta'rīkh-i Bayhaqī は四二〇／一〇三〇年代、マスウードが何度かヒンドゥークシュを越えたときのことを記しているが、中でも次の三度は途中の地名がある程度分かる例である。すなわち、四二二／一〇三一年には、バルフ→Khulm→Pīrūz Nakhjīr[18]→バグラーン→Darra-yi Zīraqān（不明）→Darra-yi Ghūrwand→パルワーンといういわばゴールバンド・ルートを取り［TB:319-21］、同年秋には逆に南から、ガズナ→カーブル→パルワーン→Pazh-i Ghūzak（Ghūrak?）→Chūgānī-yi Andarāb→Walwālīj→バルフというようにパンジュシール・ルートを取っている[19]［*ibid.*:376-78］。ただ、Ghūzak（Ghūrak?）が現在の Khawak 峠に當たるかどうかは不明である。[20] また、四二三／一〇三二年にはバルフから Darra-yi Gaz[21] を經由してガズナへ到ったと言う［*ibid.*:454-55］が、これはバルフからバルフ川沿いに南下してバーミヤーン方面に向かうと言う、いわばゴールバンド・ルートのバリエーションである。以上の場合は全て軍を引き連れた旅であり、ガズナ朝の時代ヒンドゥークシュを越えバルフ、トハーリスターンに出るメイン・ルートはいま見た三種類、すなわち

・パンジュシール川沿いに北上しおそらくは Khawak 峠でヒンドゥークシュを越えアンダラーブへ出る
・ゴールバンド川沿いに西行し Shibar 峠からバーミヤーンに出てスルハーブ沿いにバグラーン方面あるいは Samangān 方面に北上

・バーミヤーンから Kahmard へ至りバルフ川沿いに Darra-yi Yūsuf、Darra-yi Gaz を通過し、直接バルフに到る

であったと考えられる。[22] ここでクローズアップされるのがパルワーンの重要性である。北方からみた場合どのルートを取ろうとも全てパルワーンを通る。「[パルワーン] は商人の集まる地であり、インドへの門である。」[Ḥ'A:112] と言われるこの地の重要性はあらためて指摘するまでもなかろう。[23] ちなみに歴史的パルワーンの城趾はパンジュシール、ゴールバンド両河の合流點に向って北から南へ突き出した山塊の南端に位置する、現在の Jabal al-Sarāj (圖2參照) という小村の近くと考えられている [Ball 1982 1: 131; Foucher 1942-47: 141; Hackin 1939: 4]。

次に四三一／一〇四〇年のマウドゥード軍の HYBAN 行について考えてみる。マスウードは、さきに先遣隊としてバルフに送った Altūntāsh の軍がセルジューク軍に敗れたとの報を受け、本格的な援軍を送る必要に迫られていた。この時既にバルフはセルジュークに包圍され、バグラーン近邊の人々もセルジュークに從っていたと言う[24] [TB:880]。それゆえスルタン・マスウードが援軍の司令官マウドゥードに與えた指令は、「準備してパルワーンと HYBAN に向かえ。」と言うものであり、そこに留まって様子を見定めてから「トハーリスターンに行き冬をそこで過ごし、可能ならばバルフへ行って敵を追い拂え。」と言うものであった [*ibid.*:885, 895]。ヒンドゥークシュの北側の様子を見、同時にセルジュークの南下を警戒しながら行動方針を決めるのなら、前述の如くパンジュシール道、ゴールバンド道が出會うパルワーン近邊は最適の地であったと考えられ、HYBAN/Hupyān がパルワーン近邊であるというハビービーの説の妥當性は高いと考えられる。

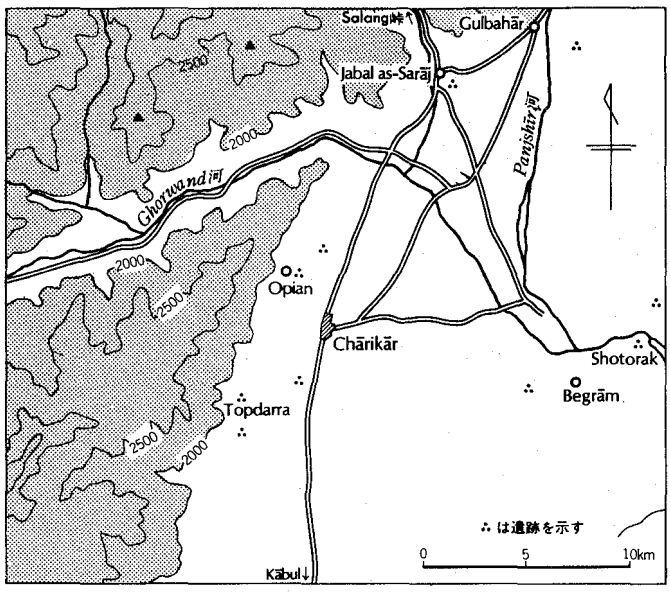
さて Hupyān が本當に現オピアン（あるいはその近邊）であるのなら、そこにはなにかそれにふさわしいものがあったのであろうか。圖2は現在のチャリカル近邊の略圖であるが、圖示した通り、今のオピアンはゴールバンド・ルートとパンジュシール・ルートの合流點に向かって西南から東北に突き出した山の端の東斜面に位置する。地圖上でオピアンの傍らにある遺跡のマークはマッソン、フシェにより報告されたマウンドである。貨幣をふくむいくらかの遺物が採集されたと言うが、殘念ながらマウンドそのものについては何も明らかにされていない［Ball 1982 1：126; Foucher 1942-47：143; Masson 1842 3：161］。一方ここに一つの興味深い記述がある。ムガール朝の創設者バーブル Ẓahīr al-Dīn Muḥammad Bābur は十六世紀初頭フェルガーナからカーブルへ向かったが、彼の自敍傳 *Bābur-nāma* にはその時の彼の行程がかなり詳しく書かれている。バーブル一行は Qubādiyān→Kahmard→Qizil Sū（スルハーブ）を下る→Dūshī→Khwāja Zayd→Ghūrwand の Ushtur Shahr→Hūbyān kötäl(峠)→Qara Bāgh→カーブルというルートを取った［閒野 1984:32-42］。この記述からもやはり、Hūbyān (Hupyān) がゴールバンドとカーブルの閒の地域、すなわちパルワーン地方にあったことが裏付けられるが、ここで注目に値するのは Hūbyān (Hupyān) を峠と言っていることである。これは何を意味するのか。現在でもゴールバンド溪谷から山を越えて南下し、直接 Qara Bāgh 方面へ拔ける道がいくつかあるらしいが、バーブルが通ったのもそれらの道の一つなのだろうか。無論ここでは如何なる斷定も下しえないが。敢えて推測するならば、Hupyān とは今のオピアンの村にそのまま當たるのではなく、もう少し廣い地域を指す地名ではなかったか。[25]

それでは次に四四二―四三／一〇五一年の Hupyān の戰いとそれが持つ意味を考えてみたい。この戰い、というよりもセルジューク朝の攻勢の前段階としてチャグリ・ベク、アルプ・アルスラン父子によるトハーリスターンの平定があった。先ず四三二／一〇四〇―四一年、マウドゥード軍の Hupyān からの徹退のゆえに、バルフにたて籠って守っていた Amīr-rak Bayhaqī と Āltūntāsh が町をチャグリに明け渡したことにより、北方の要地バルフがセルジュークの手に落ちた［IA

ix:483-84]。次いで四三四／一〇四二—四三年頃、セルジューク朝に抗してマウドゥードへの臣從を守っていたヘラートに對し、チャグリ・ベクは攻勢をかける。おそらくはこのすぐ後くらいにヘラートがセルジュークの手に落ちたと考えられる。なぜなら次にヘラートが史料に現われるときにはそこはセルジュークのムーサーの據點となっているからである[*ibid.* ix:488,506,583]。最後におそらくは四三五／一〇四三—四四年、かつてバルフにいた Amīrak Bayhaqī が固守していたティルミズもチャグリ、アルプアルスラン父子の前に陷落する。[26] そしてチャグリはバルフ、トハーリスターン、ティルミズ、Qubādiyān、Wahsh、Walwālīj の地をアルプ・アルスランに任せたと言う[Ḥs:16a-b]。

さて Hupyān の位置を前述の様に考えるならば、アルプ・アルスラン軍が Hupyān にまで到ったということはセルジューク軍がヒンドゥークシュを突破してパルワーン地方、すなわちかつてのカーピシー國領にまで攻め込んで來たことを意味する。これはガズナ朝にとって未曾有の大危機であったと言える。パルワーン地方からはインドへもアフガニスタン東部へもたやすく進むことが出來ると考えられるからである。戰鬪がどのような經緯で爲されたかは不明であるが軍を指揮してセルジューク軍を擊退し、この危機を乘り切ったトゥグリルが、その功をもってガズナ朝内部で大きく勢力を伸ばしたであろうことは想像に難くない。おそらくはこの事件がその後の彼によるガズナの王位簒奪へとつながる大きなきっかけとなったのであろう。[27] またこの事

圖2　チャリカル近郊圖



件から、この時點でガズナ朝がパンジュシール、ゴールバンド流域、すなわちヒンドゥークシュ南麓を確保した、あるいは確保していたことが明らかとなる。

次に Sakalkand について檢討するが、この地名についてはミノルスキー V. Minorsky の說が優れていると思われるのでそれに從う。

ミノルスキーはこの地名について次のように說明する。すなわち、Sakalkand は Ya'qūbī' Iṣṭakhrī ではバグラーンと Walwālij の間に記されるが、*Ḥudūd al-'Ālam* ではバグラーンの前に記されており、マルクヴァルトの推測する如くバグラーンの南方であったようである。[28] ビールーニーには Sakalkand の邊りは FARFZ と記される。FARFZ は現 Barfak（スルハーブ沿い、Doshi のやや東）に當たるであろう。Sakalkand は Barfak 近くの Iskan（アンダラーブ川を挾んで Doshi の對岸あたり?）にあたるのではなかろうか、と［Minorsky 1982:338-40］。筆者は殘念ながら手持ちの地圖、史料に據って Iskan の位置を確定させることが出來なかったが、[29] このミノルスキー說に從って Sakalkand を少なくとも Barfak 地域と考えるならば、そこはスルハーブ流域、すなわちバグラーン、ゴーリー地域あるいはバグラーン、Walwālij ルートへの南からの入口に位置する要衝であったことになる。そしてそれは、圖1に示した通りトハーリスターン側からのヒンドゥークシュ越えルートの分岐點にほぼ當たるのである。

では Sakalkand 出兵はどの樣な狀況下で起こされたのか。殘念ながら當時のガズナ朝內部について語る史料はないので、以下に述べるのは專らセルジューク朝側の事情である。

四六五／一〇七二年、當時のスルタン、アルプ・アルスランはサマルカンドにいたカラ・ハン朝の Naṣr b. Ibrāhīm に對する遠征を行なったが、ジャイフーンを渡ったところで自分の部下に刺殺されてしまった（四六五・R・I月／一〇七

二・十一月)。遠征に同行していた皇太子マリクシャーがその地で即位し、すぐさま軍の撤退にとりかかった。一方アルプ・アルスランの訃報を受けた西方ではケルマーンの Qāwurt Bek b. Isrā'īl がスルタン位を目指して行動を起こし、レイに向かった。急いで西行しレイに入ったマリクシャーは、四六六／一〇七三―七四年ハマダーン近郊で Qāwurt Bek と戦い、勝利をおさめて危機を脱した [IA x:73-74,76,78-79; Ḥs:31b,32b-34a; SIj:28-30; RṢ:120-24,126-27; ZN:44-46]。

マリクシャーが西方で戦っている間に東方では四六五・R・Ⅱ月／一〇七二・十二月、サマルカンドの Naṣr b. Ibrāhīm がティルミズに侵攻し、そこを攻め取った。マリクシャーは西行時、バルフに自身の兄弟アヤーズ Ayāz を殘して後の守りを任せていたが、彼はその時グーズガーンに行っており、その留守に Naṣr はバルフをも略奪した。J・I月／一〇七三・一月アヤーズはバルフへ歸還し、J・Ⅱ月／同二月にはティルミズへ進軍したが Naṣr 軍の前に敗走し、トハーリスターンは北方からの脅威に晒されることとなった [IA x:77]。

イブラーヒームの Sakalkand 出兵はこのような狀況下に起こされたものであった。ガズナ軍はその地でマリクシャーの叔父 'Uthmān を捕らえ、セルジュークのアミール Kumashtekīn Bilgā Bek の追擊を受けながらも引き揚げた [*ibid.* x:78]。なお、Ibn al-Athīr によればこの出兵は四六五・J・I月／一〇七三・一月のことであるが、Ḥusaynī によれば、マリクシャーが叔父 'Uthmān を Walwālij に任じたのは Qāwurt の亂平定後、ホラーサーンに戻ってからのことである [Ḥs:34b]。逆に Ibn al-Athīr は 'Uthmān のトハーリスターン行きの經緯に全く觸れていない。Ḥusaynī に從うならばこの出兵は早くとも四六六／一〇七三―七四年の出來事でなければならない。

いずれにせよガズナ朝が Sakalkand に出兵し、セルジューク朝のスルタンの叔父を捕らえたということはこの時期スルハーブ流域およびおそらくはアンダラーブ流域、すなわちヒンドゥークシュ北麓がセルジューク朝の影響下にあったことを示していると考えられる。

以上 HYBAN/Hupyān、Sakalkand の二つの地名を手がかりに四六五／一〇七二—七三年頃までの北方における兩王朝の境界について考えてみた。その結果、おそらくはセルジューク側はトハーリスターンをアンダラーブ、スルハーブ流域まで押え、ガズナ朝側はゴールバンド、パンジュシール流域を押えていた、すなわち大體においてヒンドゥークシュが境界であったのではなかろうかとの、言ってみれば當然の結論を得た。

2　バルフ、トハーリスターンの混亂——四六五—九一／一〇七二—九八

さて、前節で見たようなトハーリスターンの狀況はそれ以後の不戰期においてどの樣に變化して行ったのであろうか。セルジューク朝のバルフ、トハーリスターン統治の變化をもとに以下この點を考えてみたい。

先ず、チャグリ・ベク以降のセルジューク朝のバルフ、トハーリスターンの統治者達を史料から拔き出し、その活動を見てみよう。

① アルプ・アルスラン（四五二—五五／一〇六〇—六三）

四五二・Ṣafar 月／一〇六〇・三月にチャグリが死去すると、アルプ・アルスランがホラーサーンの malik となったが、彼がバルフ、トハーリスターンをも領有していたと考えられる［IA x:6; Ḥs:17b］。

② 不明（四五五—五八／一〇六三—六六）

四五五／一〇六三年、死去したスルタン・トゥグリルの後を繼いでアルプ・アルスランがイラクに赴いて大セルジューク朝のスルタンとなった［IA x;29; Slj:23; ZN:27］。彼が西方にある隙をついてホラーサーン以東で幾つかの反亂が起こる。先ず Khuttal のアミール（名前は不明）が、次いでヘラートに居た彼の大叔父ムーサーが、また、Chaghāniyān

のアミール（やはり名前不明）が反亂を起こした。アルプ・アルスランは叔父 Qutalmish をレイにおいて破り（四五六／一〇六四初）、イラクの混亂を鎮めた後、四五五―五六／一〇六三―六四年の間に親征を行なってこれらの反亂を次々と平定していったが、この時バルフ、トハーリスターンの統治者の名前は言及されていない[30] [IA x:34, 36-37; Ḥs:18a-b; ZN:28]。

③ Sulaymān b. Chaghrī Bek（バルフ）と Ilyās b. Chaghrī Bek（Chaghāniyān、トハーリスターン）（四五八―六五／一〇六六―七三？）

四五八／一〇六六年アルプ・アルスランは息子マリクシャーを皇太子（ワリー・アフド）に指名し、同時に諸侯（主にスルタンの兄弟、息子達）にイクタアを分割した。その際バルフは Sulaymān b. Chaghrī Bek に、Chaghāniyān、トハーリスターンは Ilyās b. Chaghrī Bek に與えられた [IA x:50]。ただ、この兩者の活動については史料は沈默している。

④ アヤーズ（四六五―六六／一〇七三―七四）

前述の如く、四六五／一〇七二年マーワラー・アンナフル遠征途上でアルプ・アルスランが刺殺されたことにより、即位したマリクシャーはマーワラー・アンナフルより撤退を開始して、兄弟アヤーズをバルフに殘したが、アヤーズはサマルカンドの Naṣr b. Ibrāhīm の軍勢に敗れ、トハーリスターンは危機に陥った。その後のアヤーズの狀況は不明である。

＊④ 'Uthmān b. Chaghrī Bek（？四六六／一〇七四）（Walwālīj）

これも前述の通り、イブラーヒームの Sakalkand 出兵の折りのトハーリスターンの（正確には Walwālīj の）アミールであり、ガズナ軍に捕らえられた人物である。その後の活動はやはり不明で、ガズナ軍から解放されたのかどうかも分からない。

⑤ テキシュ Tekish b. Alp Alslān（四六六―七七／一〇七四―八四）

四六六／一〇七三年（Ḥs:35b では四六七／一〇七四年）マリクシャーは西方の諸反亂を平定後東へ向かい、カラ・ハン朝に奪われていたティルミズを奪還した。ティルミズは將軍 Sāwtekīn に委ねられ、バルフ、トハーリスターンはテキシュにイクタアとして與えられた [IA x:92; Ḥs:35b][31]。その後、四七三／一〇八〇—八一年にテキシュはマリクシャーのもとを逐われた七千人の兵を配下に加え、ホラーサーンで反亂を起こして、メルブ・アッルード、メルヴ、ティルミズ等を押えたが、マリクシャーの遠征により和議が結ばれた [IA x:118-19]。しかし、四七七／一〇八四—八五年テキシュはマリクシャーのルーム遠征の隙に再度反亂を起こした。マリクシャーは西方遠征より急遽戻り討伐に向かった。テキシュは捕らえられ、その息子 Aḥmad が後を繼ぐことになった [*ibid.* x:137-38; ZN:66]。

⑥ Aḥmad b. Tekish（四七七—?／一〇八五—?）

彼の活動は不明である。

⑦ アルスラン・アルグン（四八五—八九／一〇九二—九六）

四八五・Shawwāl 月／一〇九二・十一月のマリクシャーの死去にともない、彼の兄弟達、息子達の間でスルタン位をめぐる爭いが始まる。マリクシャーの兄弟、アルスラン・アルグンはマリクシャーの死後、すぐさまホラーサーンに向かい、メルヴで軍を集め、バルフ、ティルミズをはじめホラーサーンの大部分を押えた。そして西方にいたベルキヤルクに對しホラーサーンの領有權の承認を求めた。しかしベルキヤルクはそれを認めず、叔父ビョリ・バルス Būrī Bars を軍勢とともにホラーサーンに派遣した。ビョリ・バルスはアルスラン・アルグン軍を擊破し、アルスラン・アルグンはバルフへ撤退した。ビョリ・バルスはそのままヘラートに留まった。その後再び體勢を整えたアルスラン・アルグンはメルヴから、ビョリ・バルスはヘラートから軍を進め、四八八／一〇九五年兩者は再び會戰した。この時はアルスラン・アルグンが勝利をおさめ、ビョリ・バルスを捕らえてティルミズに幽閉し、ホラーサーンに覇をとなえた。そして刃向かう恐れ

のあるホラーサーンのアミール達を次々と處刑し、またホラーサーンの町々の城壁を破壊していった(四八九／一〇九六)。しかし翌四九〇／一〇九七年彼に恨みを持つ配下の手にかかって死去し、彼の短いホラーサーン支配は終わりを告げた。

彼の死の直前、ベルキヤルクは兄弟サンジャルを司令官とする軍をホラーサーンに向けて送っていたが、この軍が到着する前にアルスラン・アルグンは死んでいた。後からサンジャル軍に合流したベルキヤルクはニーシャープールからバルフへ進んだ。アルスラン・アルグンの軍は彼の幼い息子を malik 位に就けていたが、ベルキヤルクの接近を知りトハーリスターンへ逃れ、それから降伏してきた。ベルキヤルクはバルフに七ケ月間留まり、ティルミズをも回復した。マーワラー・アンナフルでもベルキヤルクの名でフトゥバがなされ、ホラーサーンは一應ベルキヤルク、サンジャルのもとに定まったが、狀況は決して安定などと言えるようなものではまだなかった [IA x:262-64,265; Ḥs:48a-49a; Slj:37; RṢ: 143-44; IF:22,53,226; ZN:78]。

⑧ サンジャル（四九〇—五一一／一〇九七—一一一七）

前述の如くサンジャルはベルキヤルクとともにバルフにいたり、その後も同地に留まった。ベルキヤルクはやがてイラクに戻ったが、後に殘ったサンジャルの前には克服すべき數々の難問が殘されていた。

四九〇／一〇九七年、まだベルキヤルクがホラーサーン（おそらくはバルフ）にいた間に、ホラーサーンにいた Muḥammad b. Sulaymān b. Chaghrī Bek が反亂を起こした。彼は征服地でガズナ朝の支配者(この當時はマスウード三世)の名でフトゥバを行なうという條件で同朝の援助を取り付けてバルフに向かった。しかしサンジャルと戰い敗北し、捕らえられて眼を潰された [IA x:265-66]。

同年ベルキヤルクがイラク方面の反亂平定のためホラーサーンから歸還する際、Qūdan と Yārqtash と言う二人の者がメルヴで反亂を起こし、ホラズムをも攻めた。ベルキヤルクはイラクへ戻る途上からハバシーを反亂平定のために派遣

した。ハバシーは反亂軍に對して勝利をおさめ、Yārqtash は捕らえられた。一方 Qūdan はバルフのサンジャルのもとに身をよせ、その配下に加わった。ハバシーはこの後ホラーサーンの統治に任じられた [*ibid.* x:266-67; Ḥs:49b]。

この頃トハーリスターンではセルジュークの王子の一人で、かつてのムーサーの軍を配下に收め持っていたと言われる Dawlatshāh と言う人物[32]がいつの頃からか勢力を持っていた。彼は Walwālij' Kumanj (? Kumij) を奪い、領有していたが、四九一／一〇九八年サンジャルはこの Dawlatshāh と戰い、勝利を收めた [IA x:279]。同時にティルミズをも支配下に加えてバルフ、トハーリスターン方面の支配を强固なものとした。その結果やがてサンジャルとハバシーの間に對立が生じることとなった。

四九三／一一〇〇年ムハンマド Muḥammad b. Malikshāh との戰いに敗れホラーサーンに逃れてきたベルキヤルクはハバシーと合流する。そしてハバシーの要請でともにバルフのサンジャルを攻めることとなる。ホラーサーンの支配權をかけた決戰であったが、結局戰いはサンジャルの勝利に終わり、ハバシーは處刑され、ベルキヤルクはイラクへ逃れた [*ibid.* x:296-98; Ḥs:49b]。こうしてサンジャルのホラーサーンにおける覇權が確立した。

翌四九四／一一〇〇—〇一年今度はムハンマドがベルキヤルクに敗れ、サンジャルを頼ってホラーサーンに來た。サンジャルはダームガーンまで出向いてムハンマドと合流し、そのままレイに向かった。ところがサンジャルが留守の間にその配下 Kuntughdī の誘いに乘ったサマルカンドの Qadir Khān Jibrā'īl b. 'Umar は軍をアム川方面に進め、ティルミズを奪った。サンジャルは急ぎバルフに戻り Qadir Khān を捕らえ處刑し、ティルミズへ侵攻してそこを奪還した。その後サマルカンドに進攻したサンジャルは四九五／一一〇一—〇二年自分の許にいたカラ・ハン朝の一族 Muḥammad Khān を傀儡としてサマルカンド統治に任じた [*ibid.* x:332-33, 347-48, 350; Ḥs:51a]。

こうしてサンジャルによってホラーサーン、バルフ、トハーリスターン、マーワラー・アンナフルが平定されたのであ

る。

以上見てきた如くアルプ・アルスランのスルタン位継承以後の時代、外敵や内部反亂によりセルジューク朝のバルフ・トハーリスターン支配は動揺し不安定なものとなっていった。特に四八五／一〇九二年にマリクシャーが死んだ後は、イラク方面において王子達による激しいスルタン位争いが繰り廣げられたこともあって、そのような動揺はホラーサーン全體に波及し、とりわけバルフ、トハーリスターンは叛徒の巣といった様相を呈したように見える。少なくとも西方イラクにいたセルジューク朝スルタンの東方領土に對する影響力は弱まっていた。強力な支配の缺如は例えばDawlatshāhの如き、いつの間にかトハーリスターンに勢力を張るというような存在を可能ならしめた、そしてこの様な狀況は十二世紀初頭にサンジャルが、チャグリ・ベク以後初めてホラーサーンを中心に確固たる政權を樹立するまで續いたのである。

さてこの間ガズナ朝がみせた動きと言えば前述のMuḥammad b. Sulaymānの反亂に援助を與えたことくらいである。何故セルジューク朝の混亂に付け入らなかったのか。何故行なわなかったかという問いは何故行なったかという問いよりもずっと答えるのが難しい問題ではあるが、可能性としてあり得るのはやはりイブラーヒームの時代から再び本格化し始めたインド進出[33]に王國の軍事行動の比重がかかっていたということであろう。逆に言えばバルフ、トハーリスターンの混亂はガズナ朝の北方の脅威を取り去り、インド進出に專念し得る狀況を與えてくれたのではなかろうか。ただこの點に關しては、どちらが原因でどちらが結果なのかを判斷するのは困難である。

このように四六五／一〇七二—七三年以降、ガズナ朝はSakalkand出兵を除いて、ヒンドゥークシュを越えて北へ進みはしなかったが、セルジューク朝とて約四十年の間バルフ、トハーリスターンを實質的に支配していたとは言い難い。言い替えるなら、四六五／一〇七二—七三年以降は混亂したバルフ、トハーリスターンが兩王朝の間で一種のバッファゾ

ーンの役割を果たしていたと考えられるのである。

三　南方の狀況

次いで南方に眼を轉じてみよう。前述の通り南方の係爭地帶はブスト、スィースターン地域であった。しかしながらここには北方におけるヒンドゥークシュの如き、明確な地理的、自然的境界があった譯ではない。先ず何故ここにおいて兩王朝が接することになったのか、ブストの地理的狀況、北方との關係を檢討することにより考えてみたい。

1　ブストについて

九―十世紀のアラブ地理書にはアフガニスタン東南部に關して、南西から北へ向かって弧を描くようにスィースターン、ブスト、ザミーン・ダーワル、ルッハジュ、ザーブリスターンといった地域名が出て來る。このうちスィースターンは現在のヒルマンド湖周邊を中心とする地域。ブストは現在のラシュカリ・ガーフ近郊に Qal'a-yi Bust として殘っている。ザミーン・ダーワルはブストからおもに北方グールの山地に向かって廣がる地域と考えられている。ルッハジュの方は現カンダハール一帶のことで、今も殘るパンジュワーイの町が中心であったと言われる。ザーブリスターンはおそらく現ガズニを中心としその南方に廣がる地域と考えられる。

地理書によってはブスト、ルッハジュをスィースターンに含めるか獨立した地域とみなすかで意見が異なっている。[34] しかし兩地をザーブリスターンに含めると言う意見はない。それゆえ地理書の記述のみに據れば、ザーブリスターンとスィースターンの二つを考えた場合（ブスト、ルッハジュをスィースターンの sub-division と考えた場合）、その境界はカン

表 2　アラブと zunbīl

AH/AD	
31/651-52	al-Rabī‘ b. Ziyād の軍，スィースターンへ遠征
33/653-54	‘Abd al-Raḥmān b. Samura スィースターン總督に。ザミーン・ダーワル，ザーブリスターンの王 Zunbīl と戰う。
36/657	Ibn Samura 軍，Zunbīl，Kābulshāh と戰う。
46/666	al-Rabī‘ b. Ziyād，ルッハジュ，ザミーン・ダーワルにおいて Zunbīl と戰う。
53/673	‘Abbād b. Ziyād，カンダハール，カーブル方面に遠征。
61/681	Yazīd b. Ziyād，ザミーン・ダーワル，カーブル方面に大規模な遠征。しかし Zunbīl に大敗。
67/686	‘Abd al-Azīz b. ‘Abd Allāh，スィースターンに進出してきた Zunbīl を撃退。
74/693-94	‘Abd Allāh b. Umayya，Zunbīl と戰い，和議を結ぶ。
78/697	‘Ubayd Allāh b. Abī Bakra，Zunbīl と戰い，大敗。
79/698-99	Zunbīl と和議。
80/699	Ibn al-Ash‘ath スィースターンで反亂。Zunbīl と結ぶが，アラブ軍に敗れ，ブストにいた Zunbīl のもとへ逃げ込む。
138/755	Sulaymān b. ‘Abd Allāh，ブスト，ザミーン・ダーワルへ進軍，Zunbīl を撃退。
151/768	Ma‘n b. Zā’ida al-Shaybānī，ブストを據點としてザーブリスターン遠征。
179/795	Ibrāhīm b. Jibrīl，ブストへ進軍，ザミーン・ダーワルにおいて Zunbīl をやぶる。

（以上 Bosworth 1968b に據る）

ダハールの北であったことになる。

しかしながら政治狀況を考えると事情はやや違って來る。すなわち、七世紀後半スィースターンに進出し、そこを據點に北東をうかがうアラブ軍と、「スィースターン、Bilād al-Dāwar、ルッハジュの王」[IKh:40] と言われた Zunbīl はブスト、ルッハジュ地域で接し對立した(表2)。また Zunbīl の夏營地はザーブリスターン、冬營地はルッハジュであったと言う [FB:494; Murgotten 1969:153; Bosworth 1968b:35]。その結果七―八世紀にはブスト近邊が南北對立の接點となった。

九世紀末サッファール朝の興隆により一時これらの地域全てが統一されたが同朝の沒落後各々の地域は分裂した。そして再び十世紀末にブスト以北がザーブリスターンの支配者、すなわちガズナ朝の手に落ちる(三六七／九七八)。スィースターンもマフムードによって三九二／一〇〇二年に征服されたがかつてのサッファール家のアミールにある程度の統治權が認められたという點でブスト以北の地方やホラーサーンとは狀況が異なっていたようである [Bosworth 1977: 27-28]。ガズナ朝の軍もホラーサーンに向かう際はスィースターンを經由せずブストから Farah 方面へ出

ることが多かったようである。そのためかガズナ朝の同時代の年代記にもテギーナーバード（カンダハール）やブストは頻繁に現われるがスィースターンは餘り現われない。

これに比べてブストと北方の結びつきの強さを物語るのが、ブスト近くに殘るラシュカリ・バーザールの壯麗な宮殿趾である。この遺跡は一九四九―五一年にフランスのアフガニスタン考古學調査團（Délégation Archéologique Française en Afghanistan）によって發掘調査され、その報告書が出されている。遺跡はヒルマンド河の東岸にあり、三つの宮殿（北、中央、南）、マスジド、バーザールおよび兵舍といった主要建築物だけでも南北に約二キロの長さを持つ。このうち南宮はスルタン・マフムード及びマスウードの時代のものであることが確實視されている［Schlumberger 1978:24］。中央宮についてはアレン T. Allen がガズナ朝以前のものである可能性を指摘している［Allen 1988:61］。宮殿自體は後のモンゴルによる破壞の時まで利用されていたらしいが、バフラームシャーに到るまでのガズナ朝の各君主の貨幣が發見されていることから、これらの建築物が、この地域が再び政治對立の焦點となった四三〇／一〇四〇年代以降もガズナ朝の君主達によって利用されていたことは確實である［Gardin 1963:167-69］[35]。このような大宮殿の存在とその利用（軍事的意味をも含めた）が意味するものは、當然のことながらブスト一帶がガズナ朝にとってきわめて重要な據點であったということである。ルートを考えてみても、ガズナからの道はブストでスィースターン方面、ヘラート方面、ザミーン・ダーワル、グール方面へと三本に分かれる。また、ブストの東、ルッハジュのパンジュワーイの町からは南方、スィンドへの道が發していた［Iṣt:251; IḤ:423］。これはほぼ現在のカンダハール～クエッタ道にあたり、古くからのメインルートであった[36]。このようにブスト地方は、まさしくアフガニスタン南部の交通の要衝であったと言える[37]。このような場所をガズナ朝が重要視したのは當然であろう。そして文獻史料、およびラシュカリ・バーザールの遺跡を見る限り、セルジュク朝の壓迫を受けながらもこの一帶は大體においてガズナ朝によって保持され續けた。その結果ブストと、次に見るように

セルジューク朝の支配下に入ったスィースターンとの間に出現した兩王朝の國境地帶は、いま述べてきた如く地理的な意味に加えて政治的、歴史的意味をも持つものであったのである。

2　スィースターンの内紛と兩王朝

それではスィースターンはどの様にしてセルジューク朝の影響下に入り、またその後どの様な經過を辿ったのか。先に述べた如くスィースターンはマフムードにより征服され服屬していたが、サッファール家のアミールがかなりの影響力を持ち、また様々な土着の勢力が内紛を繰り廣げていた。そしてそのような狀況は四三二／一〇四〇—四一年以降、同地がセルジューク朝とガズナ朝の接點となったことと相まって、より複雜さを增していった。[38] 幸い我々はこの時期に關して *Ta'rīkh-i Sīstān* を利用することが出來るので、以下四三二／一〇四〇—四一年以降の同地の歴史を簡單に辿ってみよう。

四三二／一〇四〇—四一年、内亂收拾をはかるも、ダンダーナカーンの敗戰後の處理に追われるガズナ側に援助を斷わられたスィースターンのサッファール家のアミール、アブー・アルファドルはセルジュークと手をくみ、ガズナ朝から離反することを決した。彼の要請によりトゥグリルの從兄弟 Ertāsh が軍をスィースターンに進めて混亂を鎭め、ムーサーの名でフトゥバを行なった。これに對して、おそらくはスィースターンの土豪達からなる反アブー・アルファドル勢力はガズナ朝の援助を求め、ここにアブー・アルファドル、セルジューク對反アブー・アルファドル、ガズナという對立の圖式が成立する。[39] しかしこの對立も、同年及びその翌年のマウドゥードの派兵（表1參照）が、ムーサー、Ertāsh の援助を受けたアブー・アルファドルに擊退されたことによって、後者の敗北に終わり、アブー・アルファドルは反アブー・アルファドル勢力をスィースターンより排除して行くことに成功した。四四三／一〇五一—五二年、トゥグリル率いるガズナ

軍の攻撃によりアブー・アルファドルとムーサーはヘラートへ撤退し、スィースターンは一時ガズナ朝に制壓されたが、トゥグリルの死後すぐにアブー・アルファドルとムーサーの息子 Būrī がスィースターンに戻った。そして四四五・Muḥarram 月／一〇五三・四月トゥグリル・ベクの名でフトゥバが爲され、スィースターンはセルジューク朝の支配下となった [IA ix:518; TS:365-73]。

しかし今度はセルジューク朝の側に問題が生じた。ホラーサーンの malik であったチャグリ・ベクとムーサーの間にスィースターンの支配權を巡る對立が生じたのである。四四六／一〇五四年、チャグリ・ベクの息子 Yāqūtī がマクラーン遠征の途上スィースターンに立ち寄ったが、配下の處遇をめぐって Yāqūtī とアブー・アルファドルの間に反目が生じた。Yāqūtī は父チャグリに求め、トゥグリル・ベクからスィースターンの勅許狀 (manshūr) を得、四四七／一〇五五年スィースターンへ戻ってスィースターン軍との間に戰端を開く。結局四四八／一〇五六年チャグリ・ベクの使者がスィースターンに到着し、チャグリの名でフトゥバが爲され、彼の名を刻した貨幣が散金された。ところが今度はムーサーがトゥグリル・ベクに苦情を言い、かつての約束[40]を持ち出してスィースターンの勅許狀を得た。トゥグリル・ベクはチャグリ・ベクに次のような手紙を出した。

「二度とこの様な非禮はせぬように。スィースターンの勅許狀はアミール［・ムーサー］・バイグに對して書いたので、今後彼に逆らわず、その命を聞き、彼の名でフトゥバを行ない、貨幣の銘を彼の名に變えよ。チャグリ・ベクの軍がそちら方面に行ったときには彼の命令に從うこと。この旨しかと肝に命じよ。」[TS:381]

この手紙と勅許狀によりこの對立も決着した。ムーサーは息子 Būrī を軍とともにスィースターンに送り、フトゥバと貨幣の銘を自分のものに變えさせた [*ibid.*:374-82]。

簡言すれば、この時期スィースターンでは、①セルジューク朝と手を結んだアブー・アルファドルが反アブー・アルフ

ァドル、親ガズナ勢力を驅逐、②セルジューク側でのチャグリ・ベクとムーサーの支配權争いがトゥグリル・ベクの命令により決着、という過程を經て、「ムーサー＝アブー・アルファドル」ラインによる支配體制が確立したのである。また四三七／一〇四五—四六年の Ertāsh の遠征（表1参照）あるいは右に述べた Yāqūtī のマクラーン遠征に見られる如く、この時期スィースターンはセルジューク朝の南東方面作戰の前線基地として機能していたと考えられる。

殘念ながら四五一—六五／一〇五九—七三の間、*Ta'rikh-i Sīstān* の記事は缺落している。他の史料にもこの時期の同地の動きは記されていない。不明とせざるを得ないが、變化は四六五／一〇七三年のアブー・アルファドルの死去を機に始まったようである。

彼の後、息子 Ṭāhir が卽位したが、四六七／一〇七五年から Abū al-'Abbās（スィースターンの土豪）がスィースターンの町（現ザランジュ）を繰り返し攻擊し、ついに四八〇／一〇八八年、Abū al-'Abbās は Ṭāhir を處刑して、自らアミール位に就いた。しかし二年後、Abū al-'Abbās も死去し、再びサッファール家の Khalaf b. Abū al-Faḍl がアミールとなった。Khalaf はおそらくはスルタン・マリクシャーへの挨拶のために卽位後すぐにホラーサーンへ向かったが、留守中の代官であった Abū Manṣūr Qawqahī が町の人々にかつがれて彼に背いた。ホラーサーンより戻った Khalaf は Abū Manṣūr と戰い、最終的には勝利を得た。しかし、四八五／一〇九二年、Amīr Mua'yyad（やはりスィースターンの豪族か）が Khalaf を攻めて打ち負かしアミール位を奪った。四八六／一〇九三年、Khalaf はセルジュークのアミール Qizil Sārigh（ケルマーン・セルジューク）とともに再來したが敗北し、次いでガズナの軍とともに再々來したが、ガズナ軍は町を攻圍中に突如撤退してしまった。Khalaf は四八七／一〇九四年スィースターンを奪回したが、その後もスィースターンのアミール位をめぐる爭いは續き、そのうえカルマト派や外部勢力の進攻、自然災害等のためにスィース

ターンは混迷を續けた。四九六／一一〇二年、サンジャルの配下のアミール Barghash の來訪で Khalaf はサンジャルに降り、一應狀況は治まったかに見えたが、四九九／一一〇六年 Khalaf の息子 Tāj al-Dīn が父に背くなどなかなか同地に安定は訪れなかったようである [*ibid.*:383-90]。

以上の如く、四六五／一〇七三年のアブー・アルファドルの死去を機に「セルジューク＝アブー・アルファドル」ラインによるスィースターン支配は崩壞し、その後は彼の子孫とスィースターンの各豪族とがアミール位を巡って爭い續けた。おそらくは、前章で述べたようなセルジューク朝自體の東方支配の動搖のゆえもあって、同朝の統治者が任じられた氣配もない。サンジャルが登場するまでの間、スィースターンは、ある意味ではセルジューク朝（特にホラーサーン方面の）の影響圏から脫落していたと言えよう。一方、文獻史料を見る限り、ブストを保持していたガズナ朝も混亂したスィースターンにはあまり積極的な關心は持たなかったようである。その結果セルジューク朝の前線基地としての同地の役割は消滅し、かつてブスト・スィースターン間にあった兩王朝の國境は、きわめてぼんやりとした存在となっていたと考えられる[41]。その意味ではスィースターンも、この時期一種のバッファゾーンとして南方國境の不明瞭化に關與したと言えるかも知れない。

むすびにかえて

以上、資料不足の感はぬぐえないながらも十一世紀中頃から後半にかけてのセルジューク朝とガズナ朝の國境地帶の様相と政治狀況とを檢討してきた。簡單にまとめるならば、

1　大セルジューク朝時代…セルジューク朝のホラーサーン支配およびトハーリスターン、スィースターン支配の安定→

南北で兩王朝が接し戰う

2　セルジューク朝の内亂と東方の混亂…四六五／一〇七二―七三年頃を境に南北兩國境地帶が混亂の様相を呈し始める

↓バッファゾーンへと變化

3　サンジャルの登場…ホラーサーンおよびその周邊の再平定↓ガズナ遠征へ

という對應關係になる。兩王朝の間の勢力均衡狀態の背後にはこのような動きが存在したのである。

ところで本稿では觸れ得なかったが、兩王朝の間にはもう一つ重要な國境地帶であるグール地方がある。四千メートル級の山々が連なるクーヒ・バーバー山脈の中に位置するグール地方がイスラーム世界の一員となったのはスルタン・マフムード時代のことと考えられている。[42] しかしながら四三二／一〇四〇年以降サンジャル時代に到るまでの同地の歴史については殆んど何も情報がない。一方國境地帶として同地を考えた場合、問題になるのはそこへ到るルートである。諸史料に見られるグールへの道は大別して、(一)ヘラートから Harī Rūd 沿いに遡る [Iṣṭ:285]、(二)ブスト、ザミーン・ダーワルから山地に向かって北上 [*ibid.*:250; IḤ:423]、(三)ガズナからおそらく現在のウナイ峠を經由してクーヒ・バーバー山中に入る、の三つである。(一)は四一一／一〇二〇年にマスウードがヘラートからグール遠征を行なったときのルート [TB:137-43]。(二)は四〇五／一〇一四―一五年にマフムードが遠征したときのそれ [*ibid.*:136] である。(三)はマスウードがダンダーナカーンからガズナへ逃げ戻ったときにのみ現れ [*ibid.*:836-46, 851]、管見の限りではガズナ朝時代を通じてこのルートが何らかの軍事行動に利用されたという記錄は見あたらない。これらから考えると、グールへの道の要衝はヘラートとブストであったと言うことになる。本文で述べた通り、この時期ヘラートはセルジューク朝の手に、ブストはガズナ朝の手にと、兩王朝ともにグールへの道を一本ずつ有していた。それにも拘らず、兩王朝を通じてこの時期グールに關して知られる軍事行動は、唯一ガズナのイブラーヒームが、内紛調停のために乞われて行なったグール派兵

のみである［TN i:332］。セルジューク側ではサンジャルがホラーサーンで覇權を確立するまでグールに關する記錄はなく、少なくとも大規模な軍事行動はなかったようである。峻險な山々が外部からの軍を拒んだのか、あるいはボズワースの言う如くグールもやはりバッファステートとなっていたことによるのか［Bosworth 1961:128］、いずれにせよこの時期グール地方が享受していた對外的な安全が、次の時代のグール朝の臺頭と無關係であったとは思われないが、それについてはまた別の機會に考えてみたい。

注

（1）本稿では「國境」あるいは「國境地帶」という語を用いるが、これは近代的な國境線を意味しない。もちろん自然的、地理的境界は存在したであろう（例えば本稿で述べるヒンドゥークシュのような）が、原則として問題になるのは都市である。例えば本稿で「ブスト、スィースターン方面の國境」と言った場合、筆者が想定しているのは、兩王朝各々の前線であった、ブストとスィースターンの間の地域、あるいはその兩方をも含めた地域である。隨分漠然としているように思われるかも知れないが、實際には廣大な漠野の何處でも移動できるといったものでもなく、基本的には樣々な施設（おもに水を得るための）が付屬した一定の交通ルート（masālik）が當時利用されていたと考えられるので、ある程度範圍を限って考えることが出來る。

（2）本稿で使用する主な史料・文獻に關しては末尾に付した文獻表を參照されたい。

（3）IA ix:483-84 にはマスウードがルッハジュからヘラートへ軍を送り、ヘラートを一時奪回した、との記事が、また RṢ:99-100 はマスウード自身がブスト、テギーナーバード道からホラーサーンに進軍したと述べるが、TB、ZA にはそのことは記されていない。

（4）IB:141 による。この史料は十二世紀初め頃に書かれたものでセルジューク朝、ガズナ朝に關する貴重な情報を含むと言われる。尙、TN i:235 では戰場は "Darra-yi KHMAR" という場所であったとされている。

（5）IA x:580 によればチャグリと戰い擊退したのはアブド・アッラシード。

（6）IA にはトゥグリルの最後に關してインドにいたアミール Khirkhīz という人物が登場する。すなわち、トゥグリルが王位簒奪後彼に協力を求め、ともにセルジュークを擊退してガズナ朝の舊領を回復しようと持ちかけるが、Khirkhīz は斷固拒絕し、ガズナにいる者達に手紙を書き、彼らが手をこまねいて見ていることを非難した。そして自らガズナに向かったが、彼が到着する前にトゥグリルは一團の者達に殺された、と。一方 Ḥs、TN でトゥグリル打倒の立て役者となっているのは Nūshtekīn という名のグラームである。このグラームが單身或は仲間と語らってある日（四四三・Dh. Q.／一〇五一・四 in Ḥs）トゥグリルを刺殺したと言う。Khirkhīz は登場しない。この Nūshtekīn の物語は JH:548-52 にも見える。ひとり IB のみが Khirkhīz と Nūshtekīn の兩者に言及している［IB:142］。尙、Bosworth 1977: 41-47 參照。

（7）IA x:584 によればアミール Khirkhīz の示唆によりファッルフザー

ドを選んだ。多くの者はイブラーヒームを望んだが彼が病氣であったためファッルフザードに決まったという。

(8) IA x:584 によれば Khirkhīz が阻止した。セルジューク軍が何處を通ったかは不明。Ḥs:9b によればセルジューク軍はブストからきた。撃退したのは件の Nūshtekīn。

(9) Ḥs:17a によればセルジューク軍を率いていたのはアルプ・アルスラン。

(10) なお、TB:131 には、アブド・アッラシードの時代、Bū Sa'd 'Abd al-Ghaffār なる人物が、「ホラーサーンを領有していた有力なる者たち (muḥtashamān) と條約、約定を結ぶため」使節として送られたとの記述があり、この時代にもセルジューク、ガズナ兩朝の間で何らかの條約締結の試みがなされたことが伺える。ただ、この使節派遣が何年の事かの記述はない。

(11) IA x:5 によれば和議はイブラーヒーム即位後のこと。Bosworth 1977:51-52 參照。

(12) これ以上の戰いは互いに得る所なく消耗するのみだという認識からのことと言う [IA x:5]。また Ḥs:17a は「セビュクテギンの家とセルジュークの家は各々の王權に關して獨立しており、互いを占領する試みを捨てる。」と記している。

(13) 例えば後世史料ではあるが、TA i:32 參照。

(14) IA によれば四九五／一一〇一—〇二年カラ・ハン朝と通じてサンジャルを裏切った Kundughdī がサンジャルに敗れてガズナのマスウード三世のもとへ逃れ仕えた。

(15) ZA:204, n. 2. 尙、服部 1976:169-70 もこの點に觸れているが、服部氏はこれを『大唐西域記』の「護苾那」であろうとした。水谷 1971:373 も Beal をひいて「護苾那」を現オピアンにあてる。しかし「護苾那」=オピアンという說に對しては桑山氏が疑問を呈している [桑山 1987:264-65]。

(16) 水谷 1971:43 はこれを "Darra-yi Gaz" (後注21參照) にあてる。

(17) ルートの記述はそれぞれ Iṣṭ:286, IḤ:457-58, Maq:346 にある。

(18) Khulm 南東に "Pīr Nakhchīr" として現在もある。

(19) 尙、TB:738-44 によれば四二九／一〇三八年、マスウードはやはり Ghūzak を越えて北行し、バグラーンから南下するワズィールの軍とアンダラーブ地方で合流しようと企圖した。

(20) 服部 1976:169 はこれを "Ghūrak" と考え、al-Bīrūnī の *Kitāb al-Jamāhir fi Ma'rifat al-Jawāhir* (ed. F. Krenkow, Hyderabad, 1936) p. 220 にある、バグラーンとパルワーンを結ぶ峠道 Ghūrak であるとする。一方 Nāẓim 1971:29 はセビュクテギンとヒンドゥーシャー朝の王 Jaypāl が戰った地として「ガズナと Lamghān の間の丘 Ghūzak」をあげている。しかしこれが Ghūzak であれ Ghūrak であれ、いったい今のどの峠にあたるのか、確かなところは分からない。

(21) 現在の地圖にはあまりこの地名は見あたらないが、例えば、Elphinstone 1969 に付された J. Macartney の地圖には、バルフの南に "Derra Guz" としてこの地名が記されている。

(22) なお、一三九八年、サマルカンドからインドへ遠征を行ったティムールは、往路 Khawak 峠でヒンドゥークシュを越え、歸路は Shibar 峠を越えたという [加藤 1968:22-25]。14世紀末にも二つのルートがヒンドゥークシュ越えのメインルートであったことを示していると考えられる。

(23) 例えば桑山 1985:174 を見よ。また Foucher 1942-47 : 217 n. 18 は特にこの地の、パンジシール、ゴールバンド兩河地域をおさえうる戰略的重要性を述べている。

(24) TB:879-80 に據れば Ālṭūntāsh 敗北の原因はバグラーン地方の人々がチャグリ・ベグに通じたためであった。

(25) Masson もかつての Hupyān はもっと廣大なものであっただろうとしている [Masson 1842 3 : 161]。もし假にパルワーンを Jabal al-

Sarāj であると考えるなら、現オピアンはパンジュシール、ゴールバンドを挾んでそれと向かいあう山端に位置していると言える。パルワーンと對にして砦を構え、北方に對する「門」とするには恰好の場所のように見える（圖2參照）。その意味でマスウードが「パルワーンとHYBAN に向かえ。」と命じたのは示唆的である。

(26) Bosworth 1977:10-11, 尙、IF:120-21 にもそれに關する記述がみられる。

(27) 尙、Bosworth 1977:44 參照。

(28) Marquart 1901:229, 237 の當該地についての記述を指している。

(29) Adamec 1975 の付圖 I -17-B には、Doshi の東に "Eskār" という地名が見えるが、これがミノルスキーの言う "Iskan" にあたるのかどうかは不明である。

(30) ヘラートに關しては、いつ頃かは不明だがアルプ・アルスランの息子 Ṭughānshāh が統治を任され、マリクシャー時代にもしばらくは引續きその任にあったと言う。Köymen 1968 參照。

(31) Ḥs:34a に據れば、Qāwurt の亂平定後アヤーズが病死し、マリクシャーはテキシュにバルフ、トハーリスターンを委ねたと言う。

(32) Bosworth 1968a:136 では、「明らかに Ertash b. Ibrāhīm Inal の子孫」と記されているが、筆者はその根據を知り得なかった。

(33) 後期ガズナ朝時代、特にイブラーヒーム、マスウード三世時代のインド方面での活動については Bosworth 1977:61-68, 84-86 にまとめられている。

(34) ブスト、ルッハジュをスィースターンに含めるのは、例えば Yaq:281, IR:105, Iṣṭ:245。獨立した地域と見なすのは Ikh:50, Maq:305。

(35) Schlumberger 1978:22, 24, 66 に據れば、南宮には二度の火災の痕があり、その最初はグール朝の 'Alā' al-Dīn Jahānsūz による破壞の際（五四五／一一五〇頃）のものと考えられている。これが正しければ、少なくともそれ以前は宮殿自體が大きな破壞を被ることはなかったと言うことになる。一方バーザールの方は、Gardin により、マフムード治世の後、バフラームシャー時代に到るまで放棄されていたのではないかとの假説が、貨幣をもとにして提示されている [Gardin 1963:168-69]。前掲の表1にある通り、この閒セルジュークによるブストとその周邊の略奪が何度かなされているのでこの區域が破壞を被った可能性は十分にあるように思われる。

(36) 後の 'Alā' al-Dīn Jahānsūz がガズナ征服の際にとった道はグール→ブスト→ガズナであった [ṬN i:341]。

(37) ガズナ朝にとってブストと並ぶ南方の要衝であったテギーナーバードの重要さについては、次のような文章に明白に示されている。

「テギーナーバードはそこを失ったが故にセビュクテギンの一族が沒落したところの地である。」[ṬN i:396]

(38) スィースターンの內情の複雜さを現出した一因は同地のアイヤールの存在にあると言えよう。清水 1984 を參照されたい。

(39) 尙、Bosworth 1977:28-29 を參照。

(40) トゥグリル・ベグ、チャグリ・ベグ、ムーサーの三者の閒でダンダーナカーン後定められた領地分割についての取り決めのことで、チャグリは北方メルヴを中心としてホラーサーンの大半を、ムーサーはヘラートから南方スィースターン方面を割り當てられた [Ḥs:11a; Sij:18; RṢ:104]。見方をかえればこれは、いわゆるイラン北道とイラン南道に各々當たることになり、きわめて興味深い。

(41) 後にサンジャルがガズナ遠征を行なった際、セルジューク軍がスィースターンを經ずにヘラートから直接ブストに到り、しかもそこでスィースターン軍が合流している [IA x:504-5] と言う事實は、ブスト、スィースターン閒ではなく、おそらくはブスト、ヘラート閒という廣い地域の方が國境として問題となっていたことを反映しているのかも知れない。

(42) マフムード時代のグール征服については Bosworth 1961:125-28;

Nāẓim 1971:70-73 参照°

《文献表》

*一次史料

[FB]

al-Balādhrī, *Kitāb Futūḥ al-Buldān*, ed. Ṣ. Munajjid, Cairo, 1956.

[Ḥ'A]

anon., *Ḥudūd al-'Ālam*, ed. M. Stūda, Tehran, 1340AH.

[Ḥs]

Ṣadr al-Dīn 'Alī al-Ḥusaynī, *Ахбар ад-Даулат ас-Селбжӯқийӣа*, изд. З.М.Буниятов, Москва, 1980.

[IA]

Ibn al-Athīr, *al-Kāmil fī al-Ta'rīkh* (13vols.), ed. C.J. Tornberg, Beirut, 1982.

[IB]

Ibn Bābā al-Qāshānī, *Kitāb Ra's Māl al-Nadīm*, Eng. tr. by C.E. Bosworth in Bosworth 1977:132-55.

[IF]

Ibn Funduq, *Ta'rīkh-i Bayhaq*, ed. Aḥmad Bahmanyār, Tehran, 1938.

[IḤ]

Ibn Ḥawqal, *Kitāb Ṣūrat al-'Arḍ*, ed. J.H. Kramers, BGA 2, Leiden, 1967.

[IKh]

Ibn Khurdādhbih, *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, ed. M.J. De Goeje, BGA 6, Leiden, 1967.

[IR]

Ibn Rusta, *Kitāb A'lāq al-Nafīsa*, ed. M.J. De Goeje, BGA 7, Leiden, 1967.

[Iṣṭ]

al-Iṣṭakhrī, *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, ed. M.J. De Goeje, BGA 1, Leiden, 1967.

[JH]

Sayyid al-Dīn Muḥammad 'Awfī, *Jawāmi' al-Ḥikāyāt wa Lawāmi' al-Riwāyāt*, ed. Amīr Bānū Muṣaffā, Tehran, 1352AH

[Maq]

al-Maqdisī, *Aḥsan al-Taqāsīm fī Ma'rifat al-Aqālīm*, ed. M.J. De Goeje, BGA 3, Leiden, 1967.

[RṢ]

Muḥammad b. 'Alī b. Sulaymān al-Rāwandī, *Rāḥat al-Ṣudūr wa Āyat al-Surūr*, ed. M. Iqbal, Tehran, 1364AH.

[Slj]

Ẓahīr al-Dīn Nīshāpūrī, *Saljūq-nāma*, Tehran, 1964.

[ṬA]

Niẓām al-Dīn Aḥmad, *Ṭabaqāt-i Akbarī* (3 vols.), ed. B. De. & M.H. Husain, Calcutta, 1913-14.

[TB]

Abū al-Faḍl al-Bayhaqī, *Ta'rīkh-i Bayhaqī*, ed. 'A.A. Fayyāḍ, Mashhad, 1977.

[ṬN]

Minhāj al-Dīn Jūzjānī, *Ṭabaqāt-i Nāṣirī* (2vols.) ed. 'A.H. Ḥabībī, Kabul, 1963.

[TS]

anon., *Ta'rīkh-i Sīstān*, ed. Bahār, Tehran, 1935.

[Yaq]

al-Ya'qūbī, *Kitāb al-Buldān*, ed. M.J.De Goeje, BGA7, Leiden, 1967.

[ZA]
'Abd al-Ḥayy Gardīzī, *Zayn al-Akhbār*, ed. 'A.Ḥ. Ḥabībī, Tehran, 1968.
[ZN]
al-Bundārī, *Zubdat al-Nuṣrat*, Cairo, 1900
＊二次史料
[Adamec 1972]
L.W. Adamec, *Historical and Political Gazetteer of Afghanistan* 1. *Badakhshan Province and Northeastern Afghanistan*, Graz
[Adamec 1985]
L.W. Adamec, *Historical and Political Gazetteer of Afghanistan* 6. *Kabul and Southeast Afghanistan*, Graz
[Allen 1988]
T. Allen, Notes on Bust, *Iran* 26.
[Ball 1982]
W. Ball, *Archaeological Gazetteer of Afghanistan*, 2vols., Paris
[Bosworth 1661]
C.E. Bosworth, The Early Islamic History of Ghūr, *Central Asiatic Journal* 4.
[Bosworth 1968a]
C.E. Bosworth, The Political and Dynastic History of the Iranian World, J.A. Boyle, *The Cambridge History of Iran* 5, Cambridge
[Bosworth 1968b]
C.E. Bosworth, *Sīstān under the Arabs*, Rome.
[Bosworth 1977]
C.E. Bosworth, *The Later Ghaznavids*, Edinburgh.
[Foucher 1942-47]
A. Foucher, *La vieille route de l'Inde de Bactres á Taxila*, I et II, Paris.
[Gardin 1963]
J-C. Gardin, *Lashkari Bazar*, II *Les trouvailles*, Paris
[Hackin 1939]
J. Hackin, *Recherches Archêologiques à Begram*, Paris
[服部 1976]
服部直人「マフムード朝研究史料覚書」『史林』59—3.
[加藤 1968]
加藤和秀「ティームールとアフガニスタン」『北大史學』12.
[Köymen 1968]
M.A. Köymen, Selçklu Hükümdarı Togan Šah, *Necati Lugal Armağanı*, Ankara
[桑山 1985]
桑山正進「バーミヤーン大佛成立にかかわるふたつの道」『東方學報』京都 57.
[桑山 1987]
桑山正進譯注『大唐西域記』中央公論社
[開野 1984]
開野英二「『バーブル・ナーマ』の研究（Ⅱ）カーブル章日本語譯」京都大學文學部紀要 23.
[Marquart 1901]
J. Marquart, *Ērānšahr, nach der Geographie des Ps. Moses Xorenac'i*, Berlin
[Masson 1842]
Ch. Masson, *Narrative of various journeys in Balochistan, Afghanistan and the Punjab*, 3vols., London (reprinted in Graz, 1975)
[Minorsky 1982]
V. Minorsky, *Ḥudūd al-'Ālam* (*the Regions of the World*), ed. C.E.

Bosworth, Cambridge
[水谷 1971]
水谷眞成譯『大唐西域記』平凡社
[Murgotten 1969]
F.C. Murgotten, *The Origins of the Islamic State* vol. 2, New York
[Nāẓim 1971]
M. Nāẓim, *The Life and Times of Sulṭān Maḥmūd of Ghazna*, New Delhi
[Schlumberger 1978]
D. Schlumberger, *Lashkari Bazar*, IA *L'architecture*, Paris
[清水 1984]
清水宏祐「スィースターンのアイヤール——Ta'rīkh-i Sīstān の記述を中心に——」『「第三世界」の社會變動と地域研究』東京外國語大學海外事情研究所。

（本研究は昭和六三年度文部省科學研究補助費（奬勵研究A）による研究成果の一部である。）